

第79回 「ハンター」「ラブリー10」とレコードの時代

私の事務所のある品川区大井町の駅近くには、半世紀ほど前に竣工し、かつて郷ひろみ一家も住んでいた国鉄（JR東日本）大井町社宅がありました（通称、国鉄アパート）。12階建ての建物が6棟もあり、高層ビルが少なかつた当時、大井町線の車窓から見ても壮観でした。

昭和50年以降、平成の世になるまで（私の年齢だと20代半ば〜30代半ば）、休みがとれると、国鉄アパート近くにあった名画座『大井武蔵野館』で隠れた名作やマニアックな邦画を堪能し、帰りに「闇市」の雰囲気漂う平和小路でジョッキを傾けながら映画の余韻に浸る——というのではなく、大井町線高架下にあった中古レコード専門店「ハンター」に立ち寄る、というのが私の黄金コースでした。

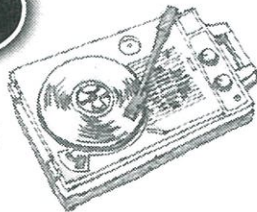
テレビであまり紹介されることのない、言わばB級C級とされる歌手やアイドル（ごめんなきい）のシングル盤を見つけては、ジャケット写真と裏面に印刷された作詞・作曲・

編曲者、歌詞を一瞥して購入してきます。シングル盤の単価が600円〜700円だった当時、ほとんど

名曲カルテ

昭和歌謡と いままで

堀井六郎
絵・松本浦



が1枚100円で購入できたので、うれしい狩猟気分が味わえました。やがて「ハンター」は深夜のテレビコマーシャルにも登場、デイパックを背負った若者が自転車に乗っている姿を後ろから撮影した映像にかぶさる「ハンター——！」の叫び声は今でも耳に残ります。

その頃、ハンターのCMと前後して『ラブリー10』という歌謡曲紹介のミニ番組が深夜に放送されていた。司会は、木ノ葉のこ&落語家の円右から若原瞳&石原プロの秋山武史へと代わりましたが、郷ひろみなどの大物は登場せず、無名歌手とマイナータレントという出演方針は変わりませんでした。

ジャニーズ事務所に所属していた赤木さとしの『いとしのカントリー

ガール』や民謡出身・原田ヒロシの『ロンリー・ガール』、現在も活躍中の柳沢純子（現・柳澤）の『あなたに片想い』など、魅力あふれる佳曲は「ハンター」で再会することもありました。ブレイク前のチェッカーズがデビュー曲の『ギザギザハートの子守唄』で登場した際には、その名のとおり要チェックして、次作品『涙のリクエスト』での大ヒットを喜んだものでした。

世は平成から令和へと移り、解体された国鉄アパートはすでになく、『ラブリー10』に登場した多くの歌手同様、「ジャケット写真」「名画座」という言葉も忘れ去られようとしています。平成の30年はレコードからCD、そして音声データへと音楽媒体が大きく変貌した時代でもありました。13センチ四方ほどのCDを初めて手にしたとき、レコード・ジャケットを味わう楽しみが失われたことを知りましたが、それでもなお音楽を実体のあるものと直結させる文化は残っていました。レコード、CDという「円盤」

「令和」という時代が「零輪」への道だとしたら、ちと、さびしい。

